

「あなたの運命の相手
は今ここにいます」催
淫香が焚かれた占い館
で処女カントを暴かれ
たカントボーイがタロ
ットの上で三回中出し
されて占い師専属の運
命の番に堕とされる話

「……っ♡♡」

座布団の上で太腿が勝手に擦り合わさる。首筋が、耳の裏が、じわじわと火照って止まらない。蠟燭の炎が揺れるたび、甘い煙が鼻腔の奥を撫でていく。

「身体が火照っていますね」

蠟燭の向こう側で、紫月がそう言った。切れ長の目を細め、薄い唇の端をほんの僅かに持ち上げる。

「だ、大丈夫です……っ♡ ちょっと、暖房が……っ♡♡」

声が上擦る。おかしい。さっきまで普通だったのに——蒼太のことを相談していただけなのに、いつの間にか身体中がじんじん熱い。下着の中がじっとり湿り始めていた。

（な、なんで……っ♡♡ おかしい……身体が、勝手に……っ♡♡）

紫月の長い指がタロットカードをめくる。最後の一枚。

「恋人のカード——正位置」

蠟燭の灯りを受けた紫月の瞳が、柊真をまっすぐに射抜いた。

「あなたの運命の相手は……今、目の前にいます」

「え……？ 蒼太くんのことじゃ——」

言い切るより早く、紫月がテーブル越しに身を乗り出す。冷たく長い指が柊真の顎を掬い上げた。

「カードは嘘をつかない。あなたの運命の人は、あなたが今
見ている人間だよ」

近い。息がかかるほど近い。白檀とムスクが混ざった匂い
が鼻腔を侵して、指先から力が抜けていく。

男なのか女なのか分からない——骨格は男のものなのに、
睫毛が長くて、肌が白磁みたいに滑らかで、ローブの胸元か
ら覗く鎖骨が妙に色っぽい。

紫月の指が顎から首筋へ滑り降りた。

「ンッ……♡♡」

たったそれだけの接触で、背中に電流が走る。指先が冷た
くて、自分の肌が火傷しそうなほど熱い。その温度差が神経
を直撃して、腰の奥がきゅう、と締まった。

「ほら……身体は正直だ」

紫月の声が耳の奥に染み込んでくる。低くて、甘くて、脳
の隙間をぬるりと埋めていく。

「この香は嘘をつけない身体にする。君の身体が、僕に反応
している」

「そ、それは……っ♡♡ 香の、せいで……っ♡♡」

「香は反応を増幅するだけ。ゼロのものは増幅できない」

紫月の指が首筋から鎖骨をなぞり、シャツの胸元へ辿り着
く。薄い布の上から、乳首の位置を正確に見つけ出した。親
指の腹がそこに触れた瞬間——

「ひっ……♡♡ やっ、やめっ……♡♡」

指がくるりと円を描く。ぞわ、と全身の毛穴が開いた。布越しなのに、乳首が硬くなっていくのが自分でも分かる。

（男なのに……っ♡♡ 胸なんか触られて、なんで……っ♡♡）

「ここに感じるポイントがある。……占い師にはね、人の身体の急所が視えるんだよ」

紫月が乳首を布越しに挟む。軽く引っ張った。

「おっ♡♡」

腰がびくりと跳ねる。座布団の上で、身体が勝手にのけ反った。香のせいで感度が何倍にも膨れ上がっていて、たかが布越しの刺激で全身が甘く痺れる。

紫月は片手で柊真の腰を支え、もう片方の手をズボンの上から股間に滑らせた。指先が割れ目のラインをなぞる——その瞬間。

「ひんっ♡♡ そこっ♡♡ だめっ……♡♡♡」

跳ね上がるように身体が反応した。足の間がじゅく、と湿る。ズボンの上からでも分かるほどに。

紫月の指が止まった。

切れ長の目が、一瞬だけ見開かれる。そしてすぐに——据わった。瞳の奥に、獣の光。

「……ああ、なるほど」

「ちっ、違っ……♡♡」

「君、カントボーイか」

心臓が止まった。

全身から血の気が引いていく。それなのに身体の芯だけが煮えるように熱い。誰にも言っていない——蒼太にも、友達にも、家族にすら正確なことは話せていない秘密。この初対面の占い師は、指先の感触だけでそれを暴いた。

「大丈夫。運命の相手には、全部見せるものだよ」

紫月の声は低く甘いまま変わらない。変わったのは目だけだ。蝋燭の灯りを受けた瞳の奥に、明確な執着が棲んでいる。

ファスナーを下ろす音がやけに大きく響いた。

「やだっ……♡♡ 待って……待ってくださ……っ♡♡♡」

抵抗する力が入らない。香に浸された身体はぐずぐずに蕩けていて、手足がまともに動かない。紫月はズボンとパンツを膝まで下ろし——蝋燭の灯りが、柊真のカントを照らした。

紫月の視線がそこに注がれる。じっと、遠慮なく。

（やだ……見てるっ♡♡ すごく、見てるっ♡♡♡）

ただ見られているだけで、カントがひくっ♡ひくっ♡と痙攣して、薄い愛液が粘膜を伝い滲み出す。

「きれいだ」

「みっ……見ないでっ♡♡ お願い……っ♡♡♡」

「誰にも触らせていないんだろう？ 処女のカントが、こんなに濡れて」

(やだ……っ♡♡ 見られてるだけなのになっ♡♡ どんどん出てくる……っ♡♡♡)

紫月の長い指がカントの割れ目に触れた。上から下へ。ゆっくりと、なぞるように。

「んあっ♡♡♡」

全身が弾ける。指一本の接触が雷みたいに駆け抜けて、視界が白く飛んだ。テーブルの上に座らされた身体がガクガク震える。

紫月が割れ目をそっと開く。くばあ、と桃色の粘膜が蠟燭の光に晒された。テーブルの上の水晶球に手を伸ばし——球面に、柊真のカントの影を映す。

「水晶にも映っている。……これが君の運命だ。僕に開かれる運命」

「へ、変なこと……言わないでっ♡♡ ぼくは男なのになっ♡♡ こんな身体……っ♡♡」

「こんな身体？こんなに綺麗なカントを持って、こんなに蕩けた顔をして、こんなに濡れていて」

紫月の目が柊真を射る。

「——自分の身体が嫌い？」

指先がクリトリスに触れた。小さく硬くなった突起をつまみ、くるりと転がす。

「やだっ♡♡ そこっ♡♡ だめえっ♡♡ おおおっ♡♡♡」

カントの奥から愛液がとろりと溢れ太腿を伝った。紫月の指がクリトリスを捏ねくり回す。小さな突起を親指と人差し指で挟んで、きゅっ♡きゅっ♡と引っ張る。

（ぼくの身体……っ♡♡ ずっと嫌いだったのにっ♡♡ こんなふうに触られたら……っ♡♡♡）

「嫌いだとしても、この身体が僕に反応しているのは事実だ。嘘をつけない身体になっている今の君が——一番正直だよ」

「ちがっ……♡♡ ぼくは男でっ……♡♡ こんなとこ触られてっ……♡♡ 感じるわけ——ひぎっ♡♡♡」

否定の言葉を、紫月の指が潰す。クリトリスを執拗に弄りながら、もう片方の手の中指がカントの入口に当てがわれた。トロトロと溢れる愛液を絡め取り、ゆっくりと押し込んでいく。

「はぁっ♡♡♡ ゆ、指っ♡♡ 入って……っ♡♡♡」

処女の粘膜が紫月の指を飲み込んでいく。きつい。けれど痛みより先に、ぬるりとした快感が全身に広がった。香の効果で身体の奥まで蕩けきっていて、異物を受け入れる準備がとっくにできてしまっている。

「処女のくせに、すぐ啜え込んだね」

「ちがっ♡♡ 啜え込んでなんか……っ♡♡♡」

「ほら、奥にもう一つ、感じる場所があるはずだ。占い師には見えるんだよ」

中指が屈曲する。膣壁の前面をぐりぐりと探り、ざらついた粘膜を見つけ——集中的に、擦り始めた。

「おっ♡♡ おっ♡♡ おっ♡♡ そこっ♡♡ やだっ♡♡ そこ変にな——おおあっ♡♡♡」

Gスポットを的確に抉られて、柊真の腰がテーブルの上でびくんびくんと跳ねる。カントがぎゅうっ♡♡と紫月の指を締め上げた。

（やだっ♡♡ 男なのにこんなところ触られてっ♡♡ 気持ちいいなんてっ♡♡ こんな……おかしいっ♡♡♡）

紫月が柊真の耳元に唇を寄せた。

「これが君の弱点。……全部、僕の指が覚えた。もう逃げられないよ」

二本目の指が入る。カントがぐちゅ♡と音を立てて広がった。二本の指が交互に屈曲して、内壁をこねくり回す。

「あっ♡あっ♡あっ♡♡ なか、かき回さないでっ♡♡♡」

三本目。きつい、と思った次の瞬間にはずるりと飲み込んでいた。カントから溢れた愛液がテーブルの上に水溜りを作る。ぐちゅぐちゅと卑猥な水音が狭い部屋に反響して、蠟燭の炎がふるふると揺れた。

「よく開いたね。三本も飲み込んで、処女とは思えない」

「やめてっ♡♡ そういふこと言わないでっ♡♡♡ ぼくは……っ♡♡ 男なのにつ♡♡♡」

「男だよ。男で、カントボーイで、僕の指で蕩けている。
——全部、君だ」

三本の指が同時にGスポットを擦り上げた。

「おっ♡♡ おっ♡♡ おっ♡♡♡ イクっ♡♡ いっちゃ——
♡♡♡」

びゅぷっ、と潮が噴く。テーブルの上に散らばったタロットカードに飛沫がかかり、紙面を濡らしていった。

「ほら……タロットカードが濡れてしまったね」

紫月が潮を浴びたカードを一枚拾い上げる。恋人のカード。透明な液に濡れて、蝋燭の光を反射していた。

「これも占いの結果だよ——君は僕のモノになる」

柊真はテーブルの上で荒い呼吸を繰り返していた。初めての絶頂。初めての潮吹き。頭が真っ白でまだ耳が遠い。

その身体を、紫月が仰向けに倒す。

「まだ終わりじゃないよ」

両脚を持ち上げられ、M字に開かされた。テーブルの上で無防備に晒されたカントに——紫月が顔を埋める。

長い黒髪が柊真の太腿にさらさらと掛かった。それだけで肌が粟立ち、カントがひくっ♡と収縮する。

舌先が割れ目を下から上へ、ゆっくりと舐め上げた。

「ひゃうっ♡♡♡ し、舌っ♡♡ そんなの知らなっ——
♡♡♡」